資　料

パ　　リ

—— 誕生から現代まで ——

[XIII]

P.クールティヨン　著
金　柿　宏　典　訳注

十八世紀　(2)

ポンパドゥール夫人の後任は，アンヌ・ベキュの娘，お針子のデュ・バリ[1]である。「私が60歳だということを忘れさせる秘術を持った唯一の女性だ」と，ルイ15世は語っている（彼女39歳で，やがて自分を「いかがわしい女」[2] la créature と呼んだマリ・アントワネットの後でギロチンにかけられる)。(補注参照)

1774年，「最愛の君」le Bien-Aimé（ルイ15世の愛称）が死んだ時，人々の喜びは大きかった。浪費家の国王は，王朝の組織に深刻な打撃を与えたのである。国庫は空だった。この治世はダミアン[3]の四つ裂きの刑のように，多くの刑罰と不安を体験した。この弑逆者は，国王の背に小刀を突き刺し，自らを世論の実行者となったことで有罪とされた（彼は「右手を焼かれ，灼熱したヤットコで挟みつけられ，体をぼろぼろにされ，両手両足を四頭の馬につながれて四つ裂きにされた後」，死体は焼かれ灰にされてしまう。またインドのフランス領財務総監だったラリー・トランダル[4]の死刑もあった。彼は自己弁明のために帰国したが，口に口輪を嵌められゴミ運搬車に乗せられ刑場に曳かれていったのである。更にシュヴァリエ・ド・ラ・バール青年[5]に対する恥ずべき判決があり，マリ＝マドレーヌ聖女を「賣笑婦」として扱ったため，5人の死刑執行人により処刑が行われている。しかしこれらの残虐さは民衆の怒りに火をつけてしまった。しかし「優勢な方につく」人々や，好運に恵まれた人々は，相変わらず愚しい浪費を楽しみ没頭していたのである。邸宅

の豪華さはその当時頂点に達していた。かってないほど，流行が特権階級の行為になる。男たちは金モールの入った型押しのビロードの上着を着用し，柔らかな三角帽をかぶり，髪粉をつけ両側に長い編毛を垂らしたカツラをつけ，バックル付きの靴をはいていた。女性たちはパニエ（鯨骨の輪でふくらましたペチコート）をつけ，歩く度に揺れる服をまとい，帽子はますます背が高くなっていた。ある女性たちは静脈を描かせていたが，それは静脈が透きとおって見えるほど繊細な肌をしている，と思わせるためであった。

パレ＝ロワイヤルでは，カフェのラ・レジャンスが上品だという名声を持っていた。この建物には楕円形のホールが付属していて，ル・サージュ[6]が述べているように，シャンデリヤと鏡で飾られ，そこでは大理石の卓で20人ほどの人がチェッカーや将棋をしている。『ラモーの甥』[7] *Neveu de Rameau* は「木管楽器を吹く」pousser du bois のをここに見物しに来ている。ルソーはこのカフェで自己の才能を示す機会を得ている[8]。

カウンターの妖精ルクレルク夫人を口説いたり，グロット・フラマンドの居酒屋でアリーヌ・ラレーニェやマネット・ラトゥールを相手にし時には牡蠣を食べながら暇をつぶしていた人物が，パリやパリの女たちの素晴らしい肖像画を描いていたのである。この男は王立印刷所の印刷工でレチフ・ド・ラ・ブルトンヌ[9]といった。彼の恋愛暦は，一日限りの愛人を彼に与えている。彼はイタリヤ人的容貌をしており，天使風にちぢれた髪，鷲鼻，あばたのある馬面，黒い目をしていた。

彼こそ「いとしき都」ville chérie パリの熱愛者で，この都会を「場面が一歩ごとに変る連続した見世物」として見ている。彼は次の如く語る。「パリの通りはオペラに似ている。もし貴方が何もする事が無くて，河岸や古本屋を散策できるなら，パリは貴方が一日中読み続けることができる頁の開かれた本である」。他の所でこうも言っている。「パリは，日光や塵がその露を乾かしてしまう前の朝の美しいバラの如く新鮮な女性の肉体である…田舎では退屈な生活だが，パリでのみ生きられる」と。

次は，首都が生じさせた最も美しい賛辞の一つである。「おおパリ，君は目にみえるように私を成長させてくれる，君は私を慰めてくれる，だから愚か者たちの偏見によって長い間堕落させられていた人間でも，君の所にくると，その人間本来の尊厳を取り戻すのだ…

おおパリ，君はあらゆる極端を統合している。大いなる都会よ，私の賞賛を受けてくれたまえ… 太陽の如く，おおパリよ，君は外に君の光を投げかけるが，他方その内側は下劣な動物がひしめいていて，君は闇なのだ」。

恋愛がオペラ座の娘の中にも，職人たちにも，庶民の女や貴夫人にも同じように根をお

ろしたようにみえる，この色事の都で，空しさ，見栄，不安定，軽薄，愚劣さから出来上った流行，人呼んで「伊達男」petit-maitre というこの時代の創造物が支配した時期だった。伊達男は蒸留水で洗顔し，必要ならば「脚のしなやかさ」mollets de jambes や「カツラのリボン」tours de cheveux postiches を手に入れる。マノン・レスコー[10]の周辺に出没するのはこのような男である。彼女はシュバリエ・デ・グリュー[11]と夫婦になるが，社会と金銭に対する悪行のため，幸福をつかみそこねる女性である。普通の四輪馬車か郵便馬車でやって来る訪問者たちの間に，彼はまぎれ込んでいる。彼は客たちをフォーブール・サン＝ジェルマン[12]や，ドォフィーヌ街[13]のアンジュー・ホテル[14]，マザリーヌ街[15]のオルレアン・ホテル，ヤコブ街[16]のモデーヌ・ホテルなどに宿泊するように勧誘する。これらの宿は，勉学に好都合なため各国から多くやって来る人たちの会合の場所であった。

しかし，無関心な君主は自分の後に何を残していったろうか？　建築については傑作がある。彼の名（ルイ 15 世）を冠した広場である（後には革命広場，ついでコンコルド広場になるだろう）。これはチュイルリ宮の柵の前にひろがっていた沼沢地と不規則な小道が行きかっていた荒れ果てた空地だったが，1757 年，士官学校の計画を立案した後に，アンジュ＝ジャック・ガブリエル[17]がこの空地の改造の設計をしたのである。この広場は国王の名がつけられ，その中央にブーシャルドン[18]製作の騎馬像が建立され，ピガル[19]作の『美徳の女神たち』*Les Vertues* がその立像を取り囲いていたので，次の二行詩が生れる。

「おお美しき立像よ！　おお美しき台石よ！
美徳の女神たちは足下に，悪徳は馬上に！」

芸術家たちは，ほとんどすべてが快楽という献立のために働いた。飾りボタンのついたゆったりした衣裳の脆弱なこの時期に，小柄な閣僚は国王やその妹たちの皇族夫人の肖像画をミニアチュア画家に注文している。ラ・トゥール[20]，ペロノー[21]，リオタール[22]が人気のある肖像画家だった。しかし最も繊細な画家たちはヴァトー，フラゴナール，ブーシェ，シャルダン[23]であり，特にシャルダンは皆と離れてデュフール街[24]のアパートに住んでいた。宮廷バレーのように，旧制度のあらゆる欠点が凝集し，あるがままの自分を示す事ができないこのパリでは，「上級社会」bonne société の人々は東洋風の服装をし，仮面

をつけ，耳を聾する騒がしい宴会を催していたから，静かな生活を描く画家シャルダン（バラ色と青色を結合させる才能で彼に匹敵する者はいなかった）は，マリヴォー[25]，モンテスキュー，ヴォルテール，ルソー，ディドロ，ダランベールらと供に，反動を予見し省察している人々の一人であった。

—— 2001.4.27. ——

パ　　リ
—— 誕生から現代まで ——
（訳　注　XIII）

1）Marie Jeanne Bécu, comtesse Du Barry（1743－1793）：彼女は東部フランスのムーズ県のヴォークルールで，1743年8月19日，アンヌ・ベキュを母親として生れた。父は天使修道会のゴマール・ド・ヴォヴェルニエなる男だといわれているが定かでない。つまりジャンンヌは私生児として生れたのである。ヴォークルールといえばあのジャンヌ・ダルクに護衛兵を与え国王シャルル7世の元に伺候させたパトロンのボードリクールが領主だった土地である。はしなくもこの小都市（人口約3,000名）はフランスの歴史上，最も有名な二人のジャンヌを世に出したのである。お針子をしていた母親は1747年にも男の子を産み，故郷にいずらくなって，兄や姉が働いていたパリに出てくる。姉エレーヌの世話で従僕をしていたランソンなる男と結婚するが，彼女は別に金持のビャール-デュソーなる男をパトロンに持っていた。彼はジャンヌを愛して正規の教育を受けさせようと考え，彼女を聖オール修道院に入れた。彼女はここで9年間を過ごし，その間に算術，歴史，デッサン，音楽などを学び，また美しく文字を書く技術を習得する。修道院を出たジャンヌは金持の未亡人の付添いを勤め，次にヌーヴ-デ-プティ-シャン街の婦人服店に賣子として勤めた。彼女はその天成の美貌で忽ち多くの上流階級の人々に知られるようになり，言い寄ってきた何人かの男たちと関係を持ったらしい。

しかし彼女は一時の浮気の相手でなく，頼り甲斐のある男を求めていた。そこに現れたのが伯爵ジャン・デュ・バリ・ド・セレース（1722－1793）である。デュ・バリ家はトゥールーズの名家で，彼もその近郊のレヴィニャックで生れている。外交官としてイギリス，ドイツ，ロシアなどで勤務したが，ショアズールにより罷免されてから放蕩無頼の生活に入り，「極道者」roué として有名だった。彼は自分の快楽の相手に素姓は卑しいが美人の女性を選び，その間に彼女を教育して上流社会の道楽者に斡旋して謝礼を取るという女衒の仕事にも精通していた。女の目利きだったデュ・バリにとり，ジャンヌはこれまでにない上玉だった。彼は彼女の両親にしかるべき金を払い，自分の愛人にする。修道院でひととおりの教育をうけ，上流社会の人たちを相手にしていた彼女は，礼儀作法も身につけており，上品な言葉で会話もできた。その上，若く飛び切りの美貌を持っている。デュ・バリはこの美女を餌に国王という大魚を釣ろうと決心したのである。彼はルイ15世の待従

ルベルに打診する。ルベルは国王の情事の相手を世話する役目を専門にしている男で，デュ・バリとは旧知の仲だった。

ポンパドゥール夫人の死（1764）以後，国王は公式の寵姫を持っていなかった。彼女の魅力に匹敵する女性が現れなかったので，彼は心に索漠たる空虚を抱いていた。彼がジャンヌと最初に会ったのは，1768年のはじめの頃と推定される。ルイ15世はこれまでのどの女性にもない魅力をもったジャンヌに完全に魅了された，といわれる。彼女によって生れて初めての快楽を知った，とルイ15世から告白されたエアン公で第3代のノアイユ公アドリアン・モーリス（1678－1766）は皮肉な陽気さをこめて，次のように答えたと伝えられる。「陛下はこれまで一度も娼家の娘たちにお会いになったことがないからでございます」と。

彼女への寵愛が深まっていき，王妃が死去（1768.6.24）した後に，侍従ルベルも死んだのを幸い，国王は彼女をこの侍従の部屋に住まわせたが，これは彼の居室の上の部屋で，彼女に会うためには階段を上りさえすればよかった。宮廷の，特に貴婦人たちの反対を押し切って，ジャンヌを正式の寵姫として認承しようとした時，ルイ15世は一つの障壁に直面する。彼女は庶民の出身であるため爵位がなく，ヴェルサイユ宮を公式に訪問する資格がなかったからである。しかしこの難問もデュ・バリ伯が解決する。彼の弟ギョームが独身で故郷のレヴィニャックで貧乏暮しをしていた。兄はこの元士官で金のためならどんな結婚でもしたがっている弟にこの上ない良縁の話があるからと，上京を促した。1768年9月1日，サン＝ローラン教区で結婚式が挙行され，ジャンヌは正式に伯爵ギョーム・デュ・バリの妻となった。この時の結婚の契約書はヴェルサイユ宮図書館に現存するそうである。夫は妻の行動をすべて是認する代償に5,000リーヴルという年金を獲得し，挙式後ただちに二人は別居する。夫はトゥールーズの田舎へ，妻は伯爵夫人としてヴェルサイユ宮へ。かくして1769年4月22日，彼女はデュ・バリ伯夫人として正式に寵姫となり宮廷に御披露目され，ポンパドゥール夫人の座に就いた。時に彼女26歳，国王は59歳であった。彼女が宮廷で確固たる地位を占めると，年金や有利な結婚などの恩恵が彼女の両親や親族に与えられ，デュ・バリ伯も彼女の相談役となり巨額な金を懐に入れた。この詐欺漢はルイ15世の死と共にスイスに亡命し，やがて故郷のトゥールーズに舞い戻り，大革命時代は国民軍大佐に任命されるが，革命暦2年雪月（1793.12.）に反革命罪で告発され死刑の判決を受け処刑された。悪人にふさわしい最後といえよう。

正式の寵姫となったデュ・バリ夫人は，自分の前任者であったポンパドゥール夫人がお

手本であり，彼女を凌駕しようとした。彼女はポンパドゥール夫人が後年になってやった事，即ち国政への参与を積極的に行った。しかし寵姫が国王と二人だけで大事を決定してしまうと危惧した宰相ショアズールは，デュ・バリ夫人の意見に反対しその行動を監視していた。宰相は自分がフランスにとり国王にとり不可欠の重要人物との自信を持っていた。宮廷の一部に根強くあった反オーストリー感情を抑制し，後のルイ 16 世となる皇太子とオーストリーの王女マリ・アントワネットの結婚を立案し，見事に実現する。1770 年 5 月 16 日，ヴェルサイユ宮で挙行された豪華な婚礼が，ショアズールの権勢の絶頂を示す時だった。そして彼は王太子妃という有力な味方も得たのである。マリ・アントワネットはデュ・バリ夫人を嫌悪している貴夫人たち，とりわけポンパドゥール夫人を愛していた国王の妹たちの妃殿下たちから，デュ・バリ夫人の素姓の下賤さや猫かぶりの上品さなどを羨望と憎悪まじりに吹き込まれて反感を抱くようになったからである。しかしショアズールはイギリスに対する復讐を忘れず，フォークランド諸島の帰属問題をめぐってイギリスとスペインが対立した時，同盟関係にあったスペインと共同でイギリスに宣戦しようとした。彼は国王に報告せず，独断で陸海軍に対し戦闘準備の命令を発したのである。ジョアズールの陣営にいたデュ・バリ夫人の密偵がこの秘密の動員令を彼女に注進し，彼女は国王に報告した。開戦という重大な国策を自分に無断で計画した宰相の独断専行に立腹したルイ 15 世は，ショアズールを解任し追放する（1770.12.24.）。後任にはモープーら，デュ・バリ夫人派が実権を握り，宰相対寵姫の権力闘争は彼女の完勝で終った。

美しい城館，多額の年金，おびただしい宝石の贈物，豪華な生活，これらすべての栄誉もルイ 15 世の死（1774.5.10.）と共に終る。疱瘡にかかった国王は 4 月 27 日に発病，2 回の瀉血を受けながらも回復せず，5 月 10 日午後 2 時に死亡。恒例により愛妾は宮廷から退去しなければならなかった。彼女を憎んでいた新国王ルイ 16 世は彼女をブリの森のはずれにあるポン・トォ・ダム修道院に監禁，一年後にやっと釈放する。やがてルイ 15 世から贈与されていたルーヴシェンヌの城館も彼女に返され，慈悲深い女領主として住民に愛されたという。しかし大革命の嵐が彼女を襲った。一旦はイギリス亡命に成功した彼女は，居城に隠してきたダイヤモンドなどが盗まれそうという話を聞き，それを取り戻すためにフランスに舞い戻った。それを昔の召使に密告され，革命裁判所で人民の敵，風俗紊乱と道徳退廃，公金横領など数々の罪名で告発され，死刑判決をうけ，その日のうちに処刑された（1793.12.7）。断頭台上で彼女は助命を嘆願して絶叫し，その悲鳴は見物人の心胆を寒からしめたという。美貌にふさわしからぬ醜い死であった。しかし私たちはフラ

ンソワ・ユベール・ドルーエ（1727－1775）の描いたデュ・バリ夫人の肖像画により，生前の美しき彼女の艶姿を見ることができる。

2）マリ・アントワネットは，自分と皇太子ルイの結婚を実現してくれたショアズールの失脚が，デュ・バリ夫人の策謀だと知らされ，彼女への敵意がますます増大する。また新婚の夫も同じ気持ちだっただけに，宮中でもデュ・バリ夫人を軽視する言動が目立ったという。デュ・バリ夫人の機嫌を損ねることが，ひいては国王の気持に反映し，マリ・アントワネットが不興を蒙り，その事がフランスの新オーストリー政策に影響しはすまいか，と心配になった彼女の母のオーストリー女帝マリア・テレサが，ヴェルサイユの娘に対し，デュ・バリ夫人への態度を改めるよう忠告した手紙が残されている。

「貴女はデュ・バリ様を，陛下の宮廷にも社交界にも出入りを許された貴婦人として，仰ぎ見る以外の目を持ってはなりませぬ。… もし貴女が自覚に欠けて身を持ち崩すなら，将来不幸や災厄や謀略が，貴女を襲うことは必定です。」
（ジャック・ルヴロン著，金沢誠訳編『ヴェルサイユの春秋』白水社刊，1987年209頁）

母親の不安は，マリ・アントワネットの断頭台上での最後を知る私たちは，悲しい予言といえよう。母の忠告が効を奏したのか，マリ・アントワネットのデュ・バリ夫人への態度は友交的になり，愛妾と可愛いい嫁との不和に気を揉んでいたルイ15世を安心させたのである。

3）Robert François Damiens（1715－1757）ルイ15世を襲ったが軽傷を負わせただけの弑逆者。アラス近郊のチューロワで生れた彼は零落した家を出て上京，ある士官に仕えてドイツの戦場をまわり，帰京するとラ・ブルドネ伯爵家やモンモランシー公家など名家やイエズス会士の家の従僕として働いた。これらの勤務先の同輩たちは，ダミアンに対して好意的発言をしている。裁判記録もこの事実を立証している。また彼は時々深酒をし，陰気で落着きのない性格だったという。

彼が王政ひいては国王個人に怨みを抱くに至った最初の動機は，自分の仕えた昔の主人たちに対する国権による迫害だった。彼が高等法院判事ベーズ・ド・リスの家で働いていた時，ルイ15世による高等法院弾圧が開始され，法院はポントワーズに移転させられ（1753.5.11.），王命に飽くまで反抗する4人の判事が逮捕されたが，その中に彼の主人も

入っていた。やがて国王と高等法院の間で妥協が成立し，判事たちも釈放される。しかしラ・ブルドネ伯ベルトラン・フランソワ・マエ（1699－1753）の場合はちがっていた。海軍提督としてイギリス海軍を破りインド征服に大功があったにもかかわらず，マドラス市の処置問題で独断専行を告発され，帰国するやバスチーユに投獄され（1748），牢内の待遇が悪かったために，やっと釈放されるや，その直後に急死してしまう（1753.9.9.）。ダミアンはこの勇将の衰弱死を見取り，圧政への憎悪がたかまっていく。時代的にみると，7年戦争による惨禍と増税，天候不順による農業不振による穀物の高騰と飢饉と必然的に発生する一揆，貧民の増加，このような国民の苦悩を全く顧慮しないルイ15世と愛妾たちの放蕩と退廃の生活などなどが，一般庶民に解消不可能な不平不満を充満させた。

最初のうち，ダミアンは国王に軽傷を与え，反省の機会を与えるつもりだったという。しかし彼が国王弑逆の決意を固めたのは，高等法院の解散（1756.12.13.）だった。彼は犯行前日に妻と娘に会っている。1757年1月3日の深夜，彼は馬車を傭いヴェルサイユに向った。午前3時頃到着し，国王はトリアノン宮に滞在中である事を知る。彼は近くに宿をとり，日中は誰もいない並木道をうろついて2日を過ごした。1月5日，国王は病気になった皇女を見舞いにヴェルサイユに来ることを知り，夕暮れと共に皇女たちの居間のある正面一階の現在では18世紀の展示室になっている博物館に通じるアーケードの下に行った。彼は衛兵や従僕たちと談笑し，国王への請願人か見物人の風を装ったのである。国王を迎えるため大理石の内庭と呼ばれる正面玄関に馬車が入って来たのは，午後6時で，冬のため既に日はとっぷりと暮れていた。国王が馬車に乗ろうと最後の階段に足をかけた時，護衛の人垣をすり抜けて，ダミアンが国王の右脇腹に小刀を突き刺した。ルイ15世は，最初，誰かがさわったと思い，「酔っ払いではないか」と普通の声で言ったが，その直後に痛みを感じ，手をやってみて出血しているのを確認したのである。「この者を捕えよ，生捕りにせよ」と国王は命じ，皇太子らに抱えられ内殿に運ばれた。幸い傷口は長かったが浅く，内臓には異常がなかった。手厚い看護により1月11日には病床を離れることができた。

傷の浅さは，ダミアンが本気で国王弑逆を断行しようとしたのではない，という疑念を生じさせる。また彼は犯行後も逃亡する素振りは全くみせず，無抵抗のまま逮捕されているのも，弑逆が目的でなく，飽くまでも，国王に国王たる責務を自覚させるための警告ではなかったか，といわれる理由である。2箇月にわたる拷問と苛烈な取調べの間，彼は一貫して自分の単独犯行であり，共犯者は皆無であると主張し続けた。また国王を殺害する

つもりはなかったし，もし殺害を決心していたら仕損じはしなかったとも主張した。彼は短刀と小刀の二本の凶器となる刃物を所持していたが，使用したのは小刀で，致命傷を与えるには不向きであった。対立していたジャンセニストとイエズス会は，相手を打倒する好機とばかりに，互いにダミアンの背後の黒幕は相手だと告発し合ったが，無駄だった。彼の主張どおり，この弑逆者は如何なる党派にも属していない一匹狼であった。彼はアンリ4世の弑逆者ラヴァイヤックが監禁されたコンシェルジュリ刑務所のモンゴメリー塔に留置された。審理は非公開だったが，3月26日だけベッドに手足を緊縛されたダミアンが，皇族や大貴族の出席した特別法廷で訊問された。拷問の傷の苦痛にもかかわらず，彼は一種の陽気さをたたえ，かって従僕として仕えた顔見知りの出席者の数人に対して言葉をかけたという。

彼の処刑は四つ裂きの刑で，ノートル＝ダム寺院に参詣した後，グレーヴ広場の処刑台で行われた。先ず国王を刺した右手が硫黄で焼かれ，両手，両足，両腿，乳房がヤットコで傷口をあけられ，そこに融した鉛が注ぎ込まれた。この苛酷な拷問にあいながらも彼は悲鳴もあげず，時々，「神よ，忍耐と力を与えたまえ！」と呼ぶのみだった。この後，4頭の馬に手足を縛って四つ裂きにしようとしたが出来ず，更に2頭を追加しても不可能だった。死刑執行人は罪人の筋肉を切ることを願い出て烈しく叱責されるが，深夜になってやっと許され，腿の筋肉の切り離しから始めたが，ダミアンはまだ死なず，最後の両腕の筋肉の切り離しの時に絶命したという。彼の家族は追放され，生家は土台まで掘り出され破壊されてしまった。

ダミアンは背が高く痩せており，赤銅色の肌でちぢれた黒髪，目は窪み，あばた顔であった，と伝えられている。

4）Thomas-Arthur, comte de Lally, baron de Tollendal（1702－1766）：フランス南東部のドローヌ県ロマン市に生れた。アイルランド人の家系で，父ジェラールはディロンのアイルランド連隊の司令官を務めた陸軍大佐だった。彼も父の跡を継ぎ，1728年には中隊を指揮した。フルーリ枢機卿の命でロシアに外交官として赴いたこともある。1741年から44年まで軍人として活躍し，フォントノワの会戦（1745.5.11.）ではサックス元帥の指揮の下，アイルランド部隊を率いて敢闘し武勲をたてた。またマエストリヒト市占領（1748）にも貢献し，少将に昇進した。彼はまた熱烈なジャコバイトで，ジェームズ3世の失敗に終ったイギリス遠征にも参加している（1746）。

1756年，イギリス軍からインド東部の支配権奪回の遠征軍司令官に任命され，中将に

昇進，同時にインド植民地総司令官となった。1758年4月にポンディシェリに上陸，防衛力が強化されていたセント－デーヴィッド砦を猛攻して占領，上陸して38日後にイギリス軍を駆逐した。しかし原地民との紛争や強引すぎる彼の独裁的作戦に反感をもった士官たちの反感も強く，また兵員不足や物資補給の欠乏もあり，マドラス攻略に失敗（1758.12.），逆にポンディシェリでイギリス軍に包囲されてしまう。英雄的な抗戦の後，遂に降伏（1761.1.16），マドラスから更にロンドンに移送された。ここで彼はフランス国内で自分に対する不正な告発や非難がなされているのを知り，イギリス政府に辯明の機会を与えてくれるよう懇願し，釈放されるやヴェルサイユに駈けつけた。彼は名誉回復のため必死に運動するが，如何んせん敵が多すぎ，遂に祖国への反逆と公金横領の汚職の罪でバスチーユに投獄されてしまうのである。彼は審問も受けないまま19箇月間も拘禁されたままだった。それから2年間にわたる秘密裁判が続き，被告と検察との烈しい攻防が繰り展げられたが，高等法院は，国益を裏切ったとして死刑の判決を下した（1766.5.6.）。その時彼は自分の白髪と戦闘から受けた傷痕を示し，「55年の奉仕の報酬がこれか！」と言ったという。気弱なルイ15世は周囲の雰囲気におされ，減刑を言いだせなかったが，後になって後悔の念を示した。ラリーはコンパスで自殺を企てたが失敗，その後は運命を甘受する態度になった。敵方は彼に最大の侮辱を加えるため，彼に口輪をはめ荷車で刑場へ曳いていった。彼はしっかりとした足取りで処刑台に昇り，見物人に自分の口輪を見せ，無実を訴えるように天を仰いでから，平然と処刑人に身を委ねた（1766.5.9.）。

この不正な判決と処刑は，広く国民の憤激と同情を惹起し，ヴォルテールが真っ先に批判の声をあげた。ラリーの息子ラリー－トランダル伯トロフィーム－ジェラール（1751－1830）の忍耐強い再審請求運動が実を結び，国王顧問会議は1778年にこの裁判の再審をルアン高等裁判所に差し戻した。高等裁判所が審理に手間取っているうち，大革命が勃発，高等法院は廃止されてしまった。しかしながら国民感情は彼を無罪と認めていた。

5）Jean-François Lefèvre, chevalier de La Barre（1747－1766）：彼はフランス北仏のドーバー海峡に面するソンム県のアブヴィル市に生れた。父の浪費のため貧窮したので，伯母のヴィランクール女子修道院長に養育された。彼は熱心に勉強し，特に数学に優秀な成績をおさめた。ベルヴァルなる老人がヴィランクール女子修道院長に言い寄り，手厳しく拒絶されたのを怨み，彼女とその甥に復讐を企んだのが事件の発端である。彼はルフェーヴルと友人エタロンドがキリスト教の祝祭の行列に会いながら脱帽しなかった事を聞きつけ，これらの青年たちを不敬罪で告発できると考えた（1765）。また不幸な事に，

アブヴィル市のポン・ヌフに立っていた木の十字架が，早朝に何者かによって破壊される椿事が生じた。アミアン司教ラ・モット・ドルレアンは証言命令書を連発し，犯人を隠匿した者も同罪として破門すると警告した。ベルヴァルは市民たちの怒りを利用し，宗教行列に帽子も脱がないような不信心者こそ犯人ではないか，とほのめかしたのである。かってヴィランクール女子修道院長と利害関係で争った裁判所顧問官デュヴァル・ド・サクールなる人物がベルヴァルに呼応して修道院長の召使や従僕など訊問し，ルフェーヴル青年の生活の細部までを調査した。その結果，彼がマリ＝マドレーヌ聖女は賣笑婦だという戯れ唄を歌った事実を掴んだ。すぐさま召喚状が彼と友人エタロンドにだされた。エタロンドは幸いスイスに逃亡できた。不幸にして逮捕されたルフェーヴルは，行列の時に脱帽しなかったのは忘れていたからだ，また聖女マドレーヌを侮辱した事はなく歌っていた時は酔っていたと抗弁したが，ベルヴァルやサクール顧問官やアミアン司教の意を体していた裁判所は彼に死刑の判決を下したのである。その処刑法は，聖女を侮辱した舌を根元から切断すること，もし罪人が自発的に舌を出さなければ，ヤットコを使用して引き抜くようになること，教会の門の前で右手を斬り落し，その後荷車でマルシェ広場に連行され処刑柱に鉄鎖で縛られ，火勢の弱い火を火刑に処せられる，という極めて残酷なものだった。スイスに逃亡したエタロンドにも同じ判決が下された（1766.2.28)。

この無慈悲な判決は，被告たちが歌ったとされる「憎むべきかつ忌ましい小唄」chansons abominables et exécrables を基礎にしていた。これを知った国民は驚きかつ被告に同情したが，ヴォルテールは敢然として抗議し，かかる判決こそ「憎むべきかつ忌しい」と断罪している。ルフェーヴル青年はこの残忍な判決に抗議し，審理はパリ高等法院に移され，被告の身柄もパリに護送された。10 名以上の有名な弁護士がルフェーヴルを弁護し，検事自身もアブヴィルの判決は破棄すべしとの結論に達したが，25 名の判事の投票の結果，15 対 10 で有罪となった。ただ処刑法のみが一つだけ改善された。被告は火刑の前に斬首され，死体が火に焼かれる，という慈悲だった。

ルフェーヴル・ラ・バールはアブヴィルに送還され，1766 年 7 月 1 日に処刑されることとなった。罪人は先ず拷問されて足の骨を折られる。気絶した彼は気付けの酒で意識を取り戻す。彼は自分に共犯者はいないと断言する。舌を切る処刑はなく，その真似をしただけだった。4 人の死刑執行人がパリから派遣されてきていた。ラ・バールは自分の首を斬るという死刑執行人に，ラリー伯爵を斬ったのは君かと質問する。そうです，との答えに刀の斬れ味を尋ね，ラリー伯を斬り損じて苦しめたのではないか，とも聞いている。伯

爵が動いてばかりいたものですから。あなたは動かないで下さい，そうすれば仕損じません。心配しないで，子供みたいな真似はしない，とラ・バールは答えた，という。首は一撃の下に斬り落され，残りの肉体と共に火にかけられた。

この不正な判決と残虐な処刑に世論は憤激し，ラ・バールと同じ容疑で逮捕された彼の友人たちの裁判の続行は不可能になった。それは担当する判事たちが民衆からの怒りの抗議に身の危険を感じ，市外に逃亡してしまったからである。大革命となって，旧制度の犯罪を摘発してその犠牲者を救済しようという国民公会は，最初にこのラ・バール事件を取り上げ，この不当な判決（1766.6.5.）の無効を宣言した（共和暦第2年霧月25日）。無智と狂言と偏見の不幸な犠牲者としてラ・バールと友人エタロンドは名誉を回復し，没収された財産は返還される事が公示された。

6）Alain-René Lesage（1668－1747）：フランスの小説家，劇作家。ブルターニュ半島南側のモルビアン県サルゾーに生れた。公証人の父や母が早く死んだため幼くして孤児なったが，後見人により財産を湯尽されてしまう。イエズス会経営の学業を終え，しばらく故郷ブルターニュで金融業者の所で働いていたが，1692年に上京，やがて文筆業で生計を立てるようになるが，彼の作家としての成功を支えたパトロンがジュール・ド・リヨンヌ神父でサン＝マルタン＝デ＝シャン修道院長だった。神父はスペイン文学に詳しく，そのためルサージュはスペイン文学作品の翻訳や翻案で文壇へデビューした。1707年に発表した喜劇『主人のライヴァルのクリスパン』*Chrispin rival de son maître* と小説『びっこの悪魔』*Le Diable boiteux* を発表し，文名を確立する。これはスペインの作家ゲバラ（1579－1644）により発表された同名の作品 *El Diablo cojuelo* の改作である。当時のパリ風俗を活写した作品として注目される。さらに1709年にはモリエールの伝統を受け継ぐと評価された風俗喜劇の傑作『チュルカレ』*Turcaret* を発表した．この作品で悪徳の権化として描かれた金融資本家たちは，この作品の上演を妨害しようとして各方面に工作を行った。ルサージュとコメディー＝フランセーズの不和はその策謀の成功である。彼はこれ以後，本格的喜劇の創作を中止し，オペラ＝コミックやヴォードヴィル的作品の執筆をするようになり，流行劇作家としてパリ社交界の寵兒になった。しかし彼の代表作は，1715年以降20年間にわたって書き続けられた長編小説『ジル・ブラース』*Histoire de Gil Blas de Santillane*（1715－35）である。悪者によって無一文にされた主人公が従僕となって全国を遍歴し，さまざまな家庭の内情をみるという形式をとっている。しかし描かれる社会層は旧制度下のフランスであり，その風俗や人物は適確かつ軽妙に描写さ

れ，史料としても貴重な18世紀フランスの風俗絵巻になっている。

7）*Neveu de Rameau*：ディドロの対話体の小説で，彼は単に『諷刺』*Satire* とだけ題名をつけていた。『ラモーの甥』は後世につけられたものである。ゲーテが1805年に独訳して出版したものが活字になった最初といわれる。後にディドロの自筆原稿が偶然に発見され，1891年にフランス語の決定版が刊行された。パレ＝ロワイヤル広場のカフェ・ラ・レジャンスで，語り手の「私」は大音楽家ラモーの甥という男と親しくなる。彼も音楽家なのだが才能が無く，もっぱら金持の御機嫌をとって，そのお情に縋って生きている社会の落後者である。しかし彼は冷徹な観察者で，当代の悪徳や偽善を鋭く摘発し，私を驚かす。私と彼との対話は生気溌剌としており，その間の彼の身振りの描写は，この奇人を活写している。但し実在のラモーの甥とは大いに異っているそうで，彼の口をかりて，ディドロが百科全書の反対派を痛烈に批判したものともいえる。冒頭のカフェの描写も見事で，今日までその面影を伝えている。

8）ルソーがこの有名なカフェに初めて来店した時，アルメニア人風の服装で，毛皮の帽子と東洋風の服に人々が注目し，物見高いパリッ兒たちが蝟集したため，その整理の警官が配置されたという。百科辞典に音楽の項を執筆していたルソーは，当時のディドロとは親友で，連れ立ってよくこのカフェに来た常連だった。

9）Restif de la Bretonne，本名 Nicolas Edme Restif（1734－1806）：ブルゴーニュ地方ヨンヌ県のサシに生れた。ラ・ブルトンヌという大農地をもつ富農の子である。少年時代を故郷で過し，やがて県都オーセールの印刷工場に勤めた。1755年に上京，印刷工として働き，2度結婚して，娘たちや孫たちから敬愛される父であり祖父だったが，人知れず放蕩無頼の夜の生活を送っていた。1766年に小説『貞潔な家族』*La Famille vertuse* を発表して以来，30年余にわたって約250篇以上の小説など書いたが，内容が多くは極めて露骨卑猥な官能描写に溢れているため，一部の好事家のみしか読者層が限定されていたので，彼の著書の初版本は稀覯本として価値が高い。シニックな好色漢であったが世渡りが上手で，大革命時代には国民公会の信用を得，さらにナポレオン政府にも仕えた。代表作は『堕落した百姓』*Le Paysan perverti*（1755），『ニコラ氏』*Monsieur Nicolas*（1794－97），『パリの夜』*Les Nuit de Paris ou Le Spectateur nocturne*（1788－94）などである。

『堕落した百姓』は，副題の『都会の危険』が示すように，主人公エドモンが田舎から都会に出てその悪習に染まり，堕落して悪業を重ねるという物語で，ルソーが『新エロイー

ズ』で流行させた「都会は人間を堕落させる」という主題をレチフ流に料理した作品であり，こんな所から彼は「どぶのルソー」Jean-Jacques du ruisseau とも呼ばれた。

『ニコラ氏』は『赤裸にされた人間の心』が示すように，作者レチフの好色的な自叙伝で，これもルソーの『告白』を範としている。主人公ニコラの生い立ちから老境まで（1734－97）の間の数多くの女性との交際をあけすけに描いたヴィタ・セクスアリスである。村の聖歌隊の少年時代に村娘と交った時から，オーセールの印刷所の主人の妻との姦通，パリにでて来てからの人妻，娼婦との交際，やがては上流社会の貴婦人との交情などが詳述されている。

『パリの夜』の副題は『夜の観察者』で，これは1788年から1794年にかけ16巻発行された。14巻までは380日の夜を記録している。彼は類稀な観察力を発揮し旧制度末期から大革命時代初期までのパリ市内に発生したさまざまな事件を刻明に記録している。露路裏の夫婦喧嘩や泥棒騒ぎ，大革命になってからの処刑風景，特にシャルロット・コルディーの処刑や9月虐殺の記述は生々しい。これはルポルタージュ文学の先駆的傑作といえる。

10）『シュヴァリエ・デ・グリューとマノン・レスコーの物語』*Histoire du Chevalier des Grieux et de Manon Lescaut*（1731）の女主人公。アムステルダムで出版された『隠退したある貴族の回想録』*Mémoires d'un homme de qualité qui s'est retiré du monde* という一連の著書の最後の第7巻として出版された。享楽生活のために平然と恋人を裏切る悪女の典型としてマノンは描かれる。フランスの歴史上，最も退廃した社会を背景に，自分の欲望の赴くまま悪業を重ねながら自由奔放に生きた女主人公マノンは，攝政時代という18世紀フランスの毒の花の如きしかしながら魅力ある女性である。

11）シュバリエ・デ・グリューは，妻マノンと対照的な誠実かつ純真な愛情を抱き続ける青年として描かれる。アミアンの町で偶然出会った16歳の少女マノンに一目惚れをした時，彼は17歳だった。マノンと手に手を取ってパリに駈け落ちした彼は，逸楽に耽るマノンの生活を支えるため，親友を裏切り，不良博徒にまで身を落し，最後はマノンと共謀して詐欺事件をおこし，このため逮捕されてアメリカに流刑になったマノンに同行する。流刑地での平和な生活も束の間，土地の司政官の甥がマノンに恋慕し，怒ったデ・グリューは決闘で相手を倒し，他の部落に逃亡しようとして荒野を彷徨ううち，力尽きたマノンは死んでしまう。彼女を葬った墓の上に伏している時，捜索隊に発見救助され，一人フランスに傷心の帰国をする，という悲劇的青春を送るのである。一途の恋に生涯をかけた男の物語は，愛の情熱というテーマをこれ以後の小説に与えている。

12) Faubourg-Saint-Germain：セーヌ川左岸，現在の第6区にあるサン・ジェルマン・デ・プレ修道院を中心にした一帯の住宅地を呼ぶ。14世紀後半，百年戦争の時，イギリス軍来襲に備えて，大修道院は城壁を建設し，濠もめぐらしたが，17世紀末には，これらの防禦施設を取り払い，住宅地とした。パリ市の城壁外の土地は，郊外 faubourg と呼ばれていたので，この一帯もサン・ジェルマン修道院を中心とする郊外という意味で，この名称が定着した。現在では修道院の横を走るサン・ジェルマン大通りを中心にして，パリの観光名所の繁華街になっており，有名なカフェのカフェ・ド・フロール，カフェ・デ・ドゥー・マゴ，ビャホールのブラスリ・リップがあり，観光客の恰好の休息場になっている。

13) rue Dauphine：第6区にあり，グラン・ゾーギュスタン河岸とマザリーヌ街を結ぶ，長さ268米，幅16米の通り。この街路は，1607年，ポン・ヌフ架橋に続き，セーヌ川とフィリップ・オーギュストの城壁の間を結ぶために建設された。しかし建設にあたってオーギュスタン修道院の庭園の一部が予定地に入ったため，修道士たちが強硬に反対した。業を煮やしたアンリ4世は，大砲で砲撃をするぞ，と脅迫して修道士たちを屈服させた。この通りが開通すると，後のルイ13世，当時の皇太子の称号をもらって，「皇太子通り」rue Dauphine と命名された。幅9.74米の当時のこの通りは，18世紀のパリの最も美しい街路で，1763年，警視庁によって最初の街燈が設置される。この通りは，1639年に城壁を越えてビュシ十字路まで延長され，現在の姿になったのである。

14) hotêl d'Anjou：ドォフィーヌ街39番地にあった。ドォフィーヌ・ホテルとも呼ばれ，家具付きのホテルで，下宿には向いていたろう。19世紀にはオビュソン・ホテルと呼ばれるようになる。中二階と中庭がある。

15) rue Mazarine：第6区にあり，セーヌ街とドォフィーヌ街を結ぶ，長さ414米，最小幅10米の通り。この道はネール門とビュシ門の間のフィリップ・オーギュストの城壁の外岸を走っていたもので，シャルル9世の頃も小道にすぎなかった。城壁が取り払われ，濠が埋めたてられて道がひろがり，両側に家が建てられた頃に，「お濠通り」rue du Fossé と呼ばれた。マザランが「四箇国学院」collège des Quatre-Nations（現在の学士院）を建設してから，現在のマザリーヌ街となった（1687)。28番地の家に，ヒエログリフを解読したシャンポリオンが住んでいた。また10番地から14番地の土地にあった掌球場に，1643年，モリエール一座の「盛名劇団」Illusutre Théâtre が入り，同年12月30日木曜日に初演している。

16）rue Jacob：第6区にあり，セーヌ街とサン・ペール街を結ぶ，長さ418米，最小幅10.7米の通り。最初，この道はサン・ジェルマン・デ・プレ修道院の北側の濠に沿っていて，プレ・オ・クレルクまで通じていた。プレ・オ・クレルク（神学生の野原）とは，修道院の北側にあった草原で，この土地の所有をめぐってパリ大学神学部と修道院が争っていたが，修道院が大学に譲歩して使用権を認めたことからこの名が生じた。そのため，この通りは，rue du Pré-aux-Clercs（1585）と呼ばれたことがあり，また修道院がこの通りの5番地に「鳩舎」Colombierを持っていたのでrue du Colombierと呼ばれたこともあった。ヤコブ街となったのはマルゴ女王がこの辺一帯を占めていた自分の宮殿の庭園内に，ヤコブに捧げる教会を建立させたことに由来する。

モデーヌ・ホテルは不明だが，26番地の邸宅が後に家具付きホテルになっているから，あるいはこれかもしれない。

17）Ange-Jacques Gabriel（1698－1782）：父も同じ名の建築家。1793年以来，王室首席建築家として，フォンテーヌブロー，ヴェルサイユ，コンピエーニュなどの諸宮殿の増改築，補修工事など行い，パリのコンコルド広場（1749－1753）とその近くの士官学校（1751）と海軍省（1767－1770），ヴェルサイユのオペラ劇場（1748－1770），プティ・トリアノン（1762－1766）など多くの秀れた作品を遺した。純粋と調和と均勢を重んじ，伝統を踏まえながら，新古典主義様式の道を拓いた。

18）Edme Bouchardon（1698－1762）：フランスの彫刻家。クストー（1658－1733）に学び，ローマ賞を得てイタリアに留学（1723－32），教皇クレメンス12世などのために製作し，名声を博した。帰国して王室彫刻家となり，パリのグルネル広場の噴水の群像，ルイ15世の騎馬像（大革命時代の1792年に破壊されてしまった），キリスト像，聖母マリア像，6人の使徒像などを製作したが，これらはサン・シュルピス教会に現存。厳粛冷厳な古典主義の代表作者である。

19）Jean Baptiste Pigalle（1714－1785）：フランスの彫刻家。ロベール・ル・ロラン（1666－1743）やルモアーヌ（1688－1737）に学び，ローマ賞に応募したが落選してしまう。しかし彼は独力でイタリアに留学（1735－40）し研鑽した。帰国後『踵に小翼をつけるメルキュール』*Mercure attachant ses talonnière*（1744　ルーヴル美術館蔵）を発表，すぐには世に認められず苦労をするが，後にポンパドゥール夫人に引き立てられ，彼女のために『ルイ15世の騎馬像』*Statue équestre de Louis XV*などを製作し，アカデミー・デ・ボ・ザールの会員になった。その他の代表作に，ストラスブルグにあるサックス元帥

の廟，パリのノートル・ダム寺院のアルクール元帥の墓などがある。

20）Maurice Quentin de La Tour（1704－1788）：フランス北部エーヌ県の県都サン・カンタン生れ。ルイ 15 世時代の代表的な肖像画家で，特にパステル画を得意とした。1750 年から王室画家となり，国王ルイ 15 世やポンパドゥール夫人や宮廷人たち，ディドロ，ヴォルテール，ルソー，ダランベールらの文学者たちやサックス元帥などの有名人士の肖像画や自画像も描いている。彼は対象としたあらゆる職業や階層の人々の容貌の特色を適確に捕捉し，その内面の精神や性格までも表現しようとしている。1746 年にアカデミー会員になった。気前の良い慈善家であった彼は生れ故郷のサン・カンタンに帰郷し（1784），無料のデッサン学校を設立している。また自作の肖像画 80 点も市に寄贈している。しかし晩年に一種の神秘思想にとりつかれて狂死したといわれる。

21）Jean-Baptiste Perronneau（1715－1783）：パリ生れのフランスの画家。シャルル・ナトワール（1700－1777）やユベール・ドルーエ（1699－1767）に学び，シャルダンの影響もうけた。肖像画家として秀れ，パステル画ではラ・トゥールを凌駕しようと努力した。しかしラ・トゥールの人気には敵しえず，パリ郊外の土地やオランダ，ロシアなどの外国で仕事をせざるを得なかった。代表作は，ルーヴル美術館の『ソルカンヴィル夫人』*Madame de Sorquainville* などである。

22）Jean Etienne Liotard（1702－1789）：ジュネーヴ生れのスイス人画家。最初故郷のジュネーヴで学び，次にパリに上京してルモワーヌ（1688－1737）についた。後にローマやウィーンを訪問，ウィーンでは女帝マリア・テレサらの愛顧を受けた。油絵やエッチングも製作したが，特にパステル画に秀れて，肖像画や家庭情景や東方風景を描いた。交際していたヴォルテールやルソーの肖像も描いているが，その他に当時の有名人のザクセン元帥やエピネ夫人も描いている。

23）Jean Baptiste Siméon Chardin（1699－1779）：指物師の子としてパリに生れた。初めカーズ（1676－1754）に学び，後に N.コアペル（1628－1707）や J.B.ヴァン・ロー（1684－1745）の助手になった。『食器棚』*Le Buffet*,『赤えい』*La Raie*,『ルーヴル』*Louvre*などを発表して，才能を認められ，アカデミー会員となった（1728）。彼は写実主義の偉大なる画家の一人である。フランドル派の影響を受け，当時の主潮であった華美で装飾的ロココ様式の中にあって，市民生活に題材を求めた静物画や風俗画を描いた。特に光と影のニュアンスに気を配り，洗練された色彩で平凡な対象も詩情豊かに描写している。ヴァトーと共にフランス 18 世紀の画家の代表である。

24）rue du Four：第6区にある。サン・ジェルマン大通りとクロワ・ルージュ十字路を結ぶ，長さ400米，幅12.5米から22米の通り。この道は昔のイシー・セーヴル街道の一部で，昔からいろいろな名で呼ばれたが，「パン焼かまど」Fourの名が残ったのは，サン・ジェルマン・デ・プレ修道院が此処にパン焼きかまどを設置しており，附近の住民たちが使用料を払って，このかまどでパンを焼いていたからである。かまどは現在のフール街とレンヌ街の四つ角に設置されていたが，1470年頃に取り払われたといわれる。

この通りは，1551年にはまだ舗装されておらず，車や通行人の不満が大きくなり，そのためパリ市長が修道院に対して，費用を負担して舗装するよう談判している。サン・ジェルマン大通りの開通（1860），レンヌ街の開通（1866），フール街の拡幅工事が，この街の風景を完全に一新してしまった。シャルダンが住んでいた番地は不明。

25）Pierre Carlet de Chamblain de Marivaux（1688－1763）：パリ生れの劇作家，小説家。ノルマンディーの法官の家系で，父は財務官としてフランス中西部のピュイ・ド・ドーム県リヨムの造幣所長を務めていたので，マリヴォーも少年時代はその地で過ごした（1700年頃）。1710年頃に上京，ランベール夫人のサロンに出入りし，ここでフォントネルからの知遇を得た。32歳で発表した悲劇『アニヴァル』*Annival*（1720）は失敗したが，『恋に磨かれたアルルカン』*Arlequin poli par l'amour*（1720）は大成功を収め，喜劇作家としての地位を確立した。しかしこの同じ1720年にジョン・ローの事業の崩壊により，父の遺産と妻の持参金の大半を失って，ポンパドゥール夫人やオルレアン公から年金を授与されたが，以後経済的に恵まれず，窮迫に近い生活を送らねばならなかった。有名作家となった彼は，タンサン夫人，ランベール夫人，デュ・デファン夫人，ジョフラン夫人ら，名流貴婦人の主催するサロンに出席し，上流社会の寵兒になっていく。それは当時のサロンの主流だったギャラントリー，懐疑主義，アイロニーをエスプリと洗練された文章で活写していくことである。1720年からヴォルテールに勝って見事アカデミー・フランセーズ会員になる（1742）までの22年間が，彼の文章活動の最も盛んな時期で，『愛と偶然の戯れ』*Le jeu de l'amour et du hasard*（1730）や『偽りの告白』*Les fausses Confidences*（1737）など約30篇の劇作，傑作小説『マリアンヌの生涯』*La vie de Marianne*（1731－41）と『成り上り百姓』*Le paysan parvenu*（1734－35）などの傑作を発表した。

彼はラシーヌによく比較され，特に女性の優艶精緻な心理描写にすぐれ，優雅繊細な文体は「マリヴォー風」Marivaudageと絶賛されたが，後には，気取ったキザな言葉遣い，

という軽蔑の意味になってしまう。とはいえ，彼の女性の恋愛心理を扱った恋愛劇は，ミュッセ，ルナール，ポルト＝リッシュらに受け継がれ，フランス演劇史に一つの流れをつくった。

補注：デュ・バリがルイ 15 世の正式の寵妃になったのは，1769 年の 26 歳の時である。国王が 60 歳になったのは 1770 年で，彼女は 27 歳。従ってテキストの 39 歳は誤りである。彼女がギロチンで処刑されるのは，1793 年で 50 歳の時である。

（続く）

追　記

（1）参考図書などは，［I］の巻末に掲載してありますので，そちらを御参照下さい。

（2）前稿［XII］に校正ミスがありました。下線の如く御訂正下さい。

p.14.（上から 13 行目）素朴<u>な</u>

p.23.（上から 5 行目）女<u>衒</u>

—— 2003.9.16. ——